

優しさを持たない人間は価値がない

暮らしに生きる 光技術

当社は光のセンサーを中心に光を電子に変換する製品の開発を行っています。目に見えない弱い光や速い現象を感知するセンサーは多くの研究や産業の分野に使われているため、普段手に取って見る機会はありません。

でも、実は身近な場所にも使用されているんですよ。それは病院。精密検査に使う「CT」にはうちの光半導体センサーが、そして脳疾患やがん細胞の早期発見に有用な「PET」には真空管の光電子増倍管が入っています。また健康診断で採決した血液を分析する装置や石油を探索する計測器、環境問題となっているCO₂検出機器にも当社の技術が。光の持つ未知な性質や応用方法を探究し、あらゆる分野で新しい産業の創出に取り組んでいるのです。

ドイツへのあこがれ 一転してアメリカへ

小学生のころは、ホトニクス(旧浜松テレビ)がどんな会社か知りませんでした。前社長である父が外国人をよく家に連れてくるので「普通の会社じゃないな」と思っていました(笑)。会社に広いグラウンドがあり、友達とサッカーチームを作って練習していたら守衛さんに怒られたことを覚えています。

父から「会社を継ぐ」「勉強しろ」と言われたことはありません。ですから進路を考える時、「好きな化学をドイツで勉強しよう」と決めました。ドイツを自指したのは、クラシック音楽の本場に行きたかったから。中学の時「1日に2時間も3時間も音楽を聞くな」と先生に怒られたほどです。これは父の影響。幼いころ一年の半分以上を海外で過ごす父が家にいるときは、そばに居たくて書斎で一緒にクラシックを聴いたものです。そこでドイツ語の勉強から始めようと、まずは獨協大学に2年間通いま

た。しかし、20歳のときに父が突然「永住権を取るため家族でアメリカに移住する」と宣言。せっかくコンピュータ先進国に行くならと、アメリカでは興味があったコンピュータサイエンスを専攻することになりました。後に会社に入ってからしばらくはコンピュータソフトを書いていたので、大学での勉強は役に立たないと思います。また、英語を話す度胸がついたのは、大学で受講した外国人向け英語クラスのおかげ。海外では自分の気持ちや意見を表現しようという姿勢がとても大事で、理解し認めらるうと努力することの必要性も学びました。

ホトニクスってどんな会社？

テレビの父と呼ばれる高柳健次郎門下生が1953年に「浜松テレビ株式会社」として創業、1983年より現社名に。光を電子に変換する技術で知られる世界的なメーカー。特に微弱な光の粒を検出するセンサー(光電子増倍管)において世界トップシェアを誇る。

同社の光電子増倍管を設置した実験施設「カミオカンデ」で1987年、現・東京大学特別荣誉教授の小柴昌俊氏が素粒子ニュートリノを初観測。2002年に同氏がノーベル物理学賞受賞したことで、研究に貢献した当社が一躍脚光を浴びた。

浜松ホトニクス株式会社

第3回

代表取締役社長 **書馬 明** さん



Profile

1956年浜松市生まれ。米ニュージャージー州立ラトガース大学卒。1984年浜松ホトニクスに入社、米国の子会社でシステム事業を手掛ける。2003年浜松ホトニクス理事、2005年米ハママツ・コーポレーション社長就任。2009年12月より現職。アメリカでの生活は32年に及ぶ。現在単身赴任。趣味はクラシック音楽鑑賞とサッカー観戦。パスタ料理が得意。

自分が やりたいことを

アメリカ人の妻とは社内結婚です。僕の一目惚れ(笑)。娘は今23歳で、アメリカの大学を卒業し、現在はその大学の病院のプロジェクトコーディネーターとして働いています。アメリカの教育は「将来何になりたいか」を重視しているので、小学校のころから校外アクティビティがとても盛ん。私も

娘にいろいろな経験をしてもらいたいと、週末は活動場所に車で送ることもありました。娘はそのころからずっと「貧しい国の産業を助ける手伝いをしたい」という思いを抱き続けているようです。

アドバイスはほとんどしませんが、心が優しい女性になればいい」といふことは願ひ続けてきました。成績が悪かった時には「勉強ができません」とも言いますが、自分がやりたいことをやらせたい」と励ましを。そして「無礼な

ことをするな」というのがわが家の信条。親から言われてきたこの言葉は娘にもきちんと伝えていきます。もう一つ「人間は人に対して優しさを持っていなければ価値がない」という言葉。これがすべての基本だと考えています。相手を思いやりながらお互いがサポートできる関係を作ること、これは個人でも企業でも同じことではないでしょうか。